

評誌同人詩

第12回

未来は 限りなく未知

中塚鞠子

同人誌を読んでいると、それぞれの傾向が
自ずと出ているのは勿論わかる。しかし長く
続いている同人誌では詩人の老齢化が進んで
いるのもわかる。高齢をテーマにした詩が多
くなってきている。「アンナ・カレーニナ」
の中でトルストイは「幸福な家庭はどれも似
ているが、不幸な家庭はそれぞれに不幸であ
る」といつている。「若者の詩はどれも似て
いるが、老人の詩はそれぞれに違っている」
と言ひ換えれば勿論どこから異論が出るか
もしれないが、老人であると一括りにできな
いのが高齢者なのだ。亡くなられた新川和江
さんもおっしゃっている、「わたしを束ねな
いで」と。少し意味は違うが……。

菊名ドラムカン「ゴミ箱夫婦」(軸152号)

身から出たゴミのような不満を

ぶつぶつぶつき打ちまけた私
妻も負けじと不平を

くたくたくどくどくと言うのかと思いきや
アツケラカンと

アキカン片付けるように
私の不満ゴミの分別をし出した妻

ぶんぶんと悪臭を漂わせているのは
本格的な心からの不満ね

とにかく料理は工夫するわね約束よ
ぐじやぐじやとくすぶつてるそれは
燃えない不満よね

自分で燃やして処分して下さいね

ゴミ箱のような妻

粗大ゴミのような私
ぶつつきゴミ箱夫婦

なんだかさわやかなご夫妻である。作者の
詩を朗読したがる妻であり、その声にうつつと
りする作者である(同誌「二人の朗読会」)。

木村勝美「不思議な『時間』」(軸152号)

初めて会った隣の彼女は

ビールを三杯飲んで
近況を語り

良かったと

笑顔で帰って行く

(略)
帰り着くまでに

多分一回は泣いて

(略)
それから
玄関を開けるだろう

子どものいない二人暮らし

夫は癌が進み
余命を告げられた

自宅がいいと
緩和ケア病棟を退去

(略)

喫茶店で知らない人と話をして、気持ち
切り替えて、また夫の死と向き合いに帰るわ
けだが、一見、限りなく不幸な状況にみえる
が、二人とも最後まで一緒にいられて幸せな
時間を過ごしている。作者は応援している。

北條裕子「ささやき」(木立ち)149号

(略)

目も見えず(でも 腱板の色はわかる)
耳も聞こえず(でも 戦鬨の雄叫びやむつ

みあう声は届く)
死の前に ピアノを弾く人

老いた指が腱板を まさぐる

「それは空恐ろしいことかと思うの」

かつては

ピアノを弾くことが 生きることだった

今は もう ピアノの前にも

長くは座れない

それでも指は 腱板に吸いつく

日光が老いた髪を 晒す

「もうすぐ 死ぬの?」

いや まだだ

思い出すまで

大切な ほんとうのことを

思い出すまで

(略)

いったいどんなささやきを待っているのだろうか。何度読んでも私には、そのささやきが解らない。人は記憶に刻まれていないけれども無意識のうちにあるはずの何かを意識しているのだろうか。それとも、おとずれるのは異界へ誘うささやきなのだろうか。未知だ。

中山巧「笑顔」(「三重詩人」266号)

隔てられたぶ厚いガラス戸の向こう

九十一歳の母が右肩を少し落として歩いてくる

近づくとしきりに戸をあけようとする

あかないことがわかりやっとう椅子にこしかける

ける

私は手にした絵画帳に黒マジックで

「元気かな」

「元気やんな」

にコツとして口を動かす

(略)

話がとぎれるとすぐ前のめりになって言う

「知った人はだーれもおらんで話し相手が

ないんさ 家まで送って」

「わかった 五時にくるわ」

必ず迎えに来るという顔

「ああよかったわ」

(略)

ガラス越しでも面会を喜ぶ母親。コロナ禍の施設ではこんな面会しかできなかったのだ。何度面会に行っても、同じ会話が繰り返され、息子は五時に迎えに来る約束を何度も繰り返し返しているのだろう。忘れるということは母親にとっては幸せなことだ。そのうち息子の顔も忘れるかもしれないが。

長嶋南子「追伸」(「天国飲屋」5号)

それがね さつちゃん

あの人は家を出ていきました

行方不明です

(略)

誰もいない部屋でご飯を食べていると

食べ物をかみ砕く音だけが

耳に響いてくるのです

食べてからはすることがありません

耳の中がじんじんしてきます

大声でわめきたくなります

かたわらで猫がじっと見つめています

さつちゃん 行方不明なのは

わたしです

家には行方不明が服を着て

来客を待っています

近くまで来たらお寄りください

あれ 行方不明はあの人でした

いえわたしでした

いいえさつちゃんですよ

かたわらで猫がじっとみつめています

やさしい言葉で書きながら、怖い、この人

独特の詩である。独りで暮らしている私も、

ときどきこんな状態になることがある。でも、

本当に痴呆になって意識が混濁してくると、他人事ではないかもしれない。何が起こるか判らない。未来は限りなく未知に溢れている。

後恵子「颯爽と旅に出たい」〔RIVIERE〕195号

春風に向って

颯爽とキャリーバッグを転がせ

旅立つ若い人たち

元気な姿は羨ましい

(略)

小さいことにくよくよ悩むようになった

耳が悪く言葉が聞き取れなく

歩くと右膝が痛み

パーキンソン病で歩みがのろくなり

明日のことを煩うな

時々鼓舞するような呪文を唱えている

(略)

インドやイスラエルを歩いてきた

あの逞しさは失せてしまった

休みなさいのサインだろうか

(略)

そうです。休みなさいのサインです。あな

たは昔、颯爽とキャリーバッグを転がして旅

に出たじゃありませんか。今円安で、海外旅

行は高くなる、海外旅行をしたいと思う若者、

自由に行ける若者は、二割もないそうだ。しかもイスラエルなんて今は危険。あなたはいい時代に生きてきたのです。

市原礼子「猫のいない風景」〔RIVIERE〕195号

(略)

夜中に「茶茶めー」と大きな声がした

夫が茶茶の絵に向かって

死んでしまったことをなじっているようだ

私は寝ていてその声を聞いた

朝確かめるとやつぱりそうだった

夫は次第に元気がなくなっていく

あまり食べなくなってきた

(略)

もつと食べてよ

食べないと……

夫は苦笑いで水割りで正露丸を飲み下す

(略)

愛猫が亡くなって、寂しくなった年寄二人

の生活。寂しがらる夫を妻はけんめいに元気づ

ける。それは、また一人づつ欠けていき、更

に寂しくなるであろう生活を暗示している。

いずれどちらかひとりが残されるのである。

石村勇二「感謝する日々」〔RIVIERE〕196号

結婚するとは何かを知らないで結婚し
子育てとは何かを知らないで
子どもを生ませた
あまりに未熟だった日々

ただひたすら自分のやりたいことをし
自分の好きなように生きてきた

統合失調症にもなった

アルコール依存症にもなった

アルコール依存症にもなった

(略)

七九歳になったわたし

離婚して実家に戻った息子が

職場に向かうために

朝早く起きて朝食を作る

強迫性不安障害の娘のために

今日も一緒に外出する

毎日のように家族のための夕食を作る

妻や息子や娘に

やさしい言葉をかけられるようになった

(略)

幸せそうに動き回っている作者の姿が目

浮かぶ。統合失調症の苦しい時間を支えてく

れた妻やアルコール依存症の仲間たちのおか

げで乗り切れ、今がある。励ましてくれた家

族に仲間宇宙に、今日も感謝をする作者の

姿は神々しい。人は支え合って暮らしている

のだということを教えられる。

在開洋子「ゴミ出しの日に」(「アリゼ」221号)

ゴミ出しの日は楽しいね

近所の誰彼とお会いしてお喋りをする

今朝は斜め向かいの宮下さんに会った

お姑さんの介護にご主人の看病とつづいて

毎回重そうに大きな袋をお出してあったが

近頃は軽々と小さな袋を提げていらつしや

る

お一人身になられたのだ

(略)

今日は珍しく

「腰が痛くて…」とこぼされる

「良いお天気でグラントゴルフの日なのに」

と

お互いの老いの不具合を託ち合い

「あなたお歳は？」と訊ねられる

「八十二歳なの」

「まあ 十歳もお若いのね」

(略)

十歳 彼女にとって過去の十年は

はるかな年月に思えるのだから

十年 わたしにとって未来の十歳は

たとえば小石が坂をころがるような

そんな速さに思えるのだが

宮下さんがお姑さんとご主人を見送ったこ

とを、説明ではなくゴミ袋の大きさと表現する
るところはさすがだと思う。何気ない日常を
切り取って深く考える詩が書ける人だ。

岡田満里子「面会の日」(「アリゼ」221号)

おかあさん まりこやで ひさしぶりやな

あ

(略)

手をさすりながらゆっくり話しかける

両隣は寝椅子の女性で どちらも眠つてい

る

あれ娘さんじゃろうか

そうじゃろう 娘いうてもええ年じゃ

髪真っ白じゃけえ

テーブルの向こうから 大声の内緒話が

聞こえる

(略)

母はうつすら眼をあけてうなずく

右隣の女性のぼっかり開いた口から

透明なたましい出たり入ったりして

晩春の光を浴びていて

新型コロナウィルスの日々が遠のいて

県外者の面会がようやく解禁になったが面

会時間は十五分だ

(略)

コロナウィルスが蔓延している日々は、ま

ったく面会でできなかったり、面会でできてもガ
ラス窓越しで、感染を嚴重に防ごうとしていた。
家族といっしょでも、施設にいても、感
染すると危険な高齢者を守るのは大変だった。
海外の国々に比べる日本はまだましだった気
がする。長寿社会の悲喜劇といえる。

月岡一治「シャボン玉 飛ばそ」(「アリゼ」221号)

号)

朝洗面台の鏡に向かって身支度するたびに

この台の上であれが必要だな

と思うけれど

離れると忘れてしまふ

(略)

ある朝 洗面台の隅にちいさなカップが置

いてあった

ああ これ これだよ

これがあればこの小物を入れておける

妻がやってきて

やっと置けたのよ なんども忘れて

あなたの朝支度のあとを見て

これは散らかる あれがあれば と

思っては忘れての繰り返しだったの

それできのうはすぐに取りに行ったの

でも どうしてすぐ忘れるの？

「シャボン玉症候群」というんだ
初めて聞いた：

今ぼくが命名したんだ

僕たちの脳が

子どもに帰ってシヤボン玉を吹いてあそび
だしたんだよ。

(略)

いろんなものをシヤボン玉に入れて飛ばし
パチン！ほら忘れちゃった。何度でも思いつ
こうよ。いっしょに。これは愉快だ。一〇〇
歳ごろのまどみちおさんの詩を思い出す。奥
さんも自分もほんやり、のんびり、でも気に
しない。そんな毎日の暮らしが書いてある。

井崎外枝子「母ニ」それから」〔笛〕306号

アナタノ アノ アツタカイ

球体ニツツマレイタ時ニ アナタノ

子宮ヲ囁ミ切ツテシマウコトヲ

ワタシハ ナゼ気付カナカッタノダロ

ウ

〔母ニ〕最終連〔笛〕45号

わたしはいま 自らの言葉に打ちのめされ
ている

二十代 なんとという激しさだろう

あれから五十年以上 書いたことすら忘れ
老年のいままた 頻繁に現れてくる

(略)

アナタノ ホントウニシタカッタコト
ハ

細イメスデ ワタシノ頭トイワズ

腹トイワズ 突キ刺スコトデアッタノ

カモ知レナイ

ダガ 母ヨ ソレデモワタシハ

アナタヲ 恨ンダリセズ

(略)

〔同〕3連

一九歳 自分の中で密かに
決着をつけたはずなのに

どうしてこれほど残酷に書くのか

(略)

人ひとり この世に生まれ出るには

これほどの葛藤が要るものなのか

母は最期まで何も言っってはくれずに世を去
った

(略)

この詩を読んでから、この母子の激しい確
執が目が背けられなくなった。出生に何か事
情があったのか、育つ間の事情かも知れない。
この母に対する子の思いは、単なる恨みや拒
否ではなく、限りなく求める母への愛である。
このような母子の憎愛の激しさを、老年にま
で持ち続けられるというのは稀有のこと。書
かずにいられなかったのだろう。

詩は青春の文学だ、と言われるが、誰がそ
んなこと言ったのだろう。そんなことはない。
幾つも齢を重ねて生きてきた人たちが、幾年
も過ごした年月は人それぞれのもの、固有の
人生であれば、そこから詩が生まれても不思議
はない。今まで私は、実は老人の詩、孫の
詩は嫌いであった。しかし今回考えさせられ
た。これから経験したことのない死を迎える
にあたって、人生の総決算をする人もあろう
し、未知の未来を見つめる人もあろう。

高齢者、と一括りにしてはいけないのだ。

その他「飛脚」はマイペースを行っている
し、「歷程」はベテランの方々のもの、面白
い詩が多くあった。新しく創刊された「VO
Y」は、素晴らしくお洒落で高級そうな装丁。
比較的若い人たちのものらしく期待している。

【受贈誌誌】

「アリゼ」221号・「石ノ森」201号・「石ノ森」

二〇二四アンソロジー・「KAIGA」126号・

「gaga」27号・「GAGA」90号・「交野ヶ原」

97号・「黄薔薇」223号・「木立ち」夏14号・「組

香」9号・「軸」152号・「天国飲屋」5号・「飛

脚」46・47号・「笛」306号・「ぼとり」74・75

号・「VOY」創刊号・「Messler」63号・「三

重詩人」266号・「RIVERRE」195・196号・「歷程」

618号。